

83 明治10年9月25日 菊池長閑宛

第九号 九月廿五日 (長閑注記)

第六七二号無滞達したり先達申上たる食後の楽みハ如児共遊ひなり然し当国にてハ年寄迎も四角張て而已居らし客を饗し子供等を喜ハす為若い者と一所に成て遊ふ事なり日本とハ違ひ父と云ても恐い顔計してハ居らぬ而已ならず却て顔色を和け可愛かる故子も父を可愛かる事母に同じく否かる父を引摺出して児供遊ひをさする事を楽むなり父ハ敵なるへしとハ善教なれ共日本の風ハ敵なるに過て常に叱りそうな顔をして居故子ハ只恐るゝ而已にて一向に父を愛すると云ふ事なし夫故成長して威しか聞ない時に成と愛と云ふ事かないから外側のミ父を敬ふもの多い事と思はる於すみさまの手紙ハ殊の外面白拜見セリ即今ハ上等小学八級に昇られたる由恐悦千万何卒此後共精を出して学問なされたし(抹消)〔当月上旬に〕北方に名高高山「マウント、ワシントン」ハ「ホワイト、マウンテンス」山脈中ニ在て海面を距る事凡(抹消)〔ハ〕七千尺なるか当月上旬登山セリ右山にハ絶頂まで三マイルか間た鉄道を掛蒸気車にて登るへし余所とハ違ひ登る片ハ器開ハ後より客車を押上げ車の下にハ「クサビ」の如きものありて鉄道の真中に(抹消)〔ある〕二寸位宛間を置いて並へたる鉄の横棒の間にチヨツ／＼ト這入器開車が損しても客車が山下に落ぬ様に

したる無類の蒸気車なり客車の大サハ平地に用るものゝ半分位にて一返に只一ツ宛上下するなり其遅き事三マイル即ち一里少し余の道を一時間にて登り降り(抹消)にハ少し早し鉄道の急なる事何かに取付しにハ(抹消)「立られ」車の中に立居られぬにても知へし又橋の如きものに蒸気車の「クサビ」と同じ理屈の押□か付居り手にて扱ひ往留りをなすへきものあり右のものにて鉄道を滑り下る井ハ絶頂より麓まで僅か三分の間に降られるにても路の険しきを知へし車窓より伺き見れハ一方ハ数千丈の谷一方ハ山の走りにて草木生茂り(抹消)「其風景の遙かなる事」路ハ急なる故振返り見ても今来し道ハ見えす登るに随ひ木ハ段々小さくなり絶頂近所に到れハ花崗石(盛岡にて胡麻石と云ふの種類の)乱れ重なり木ハ全く絶て芝(レバ)に似たる草のミありたり一年中此山にて晴天を見る事甚た稀なるか幸此日ハ一天晴渡り四方の眺望至て好絶頂の旅客屋に着たる頃ハ丁度入日時分にて頂より眺めたる夕照の景の美なる事言語述難思れたり山頂ハ寒かるへしと厚着して往たるに旅籠屋の内ハ至て暖(抹消)「にて」なりしか空気が薄らきたる故呼吸ハ六ヶ敷喉の乾たる事風を引た時の如くなりし翌朝五時に起日の出を見たるに谷間にハ白雲棚引て恰も海の如く山々の嶺ハ左ながら島かと思へれ彼雲に旭の映したる景色の美事なるハ言語に絶したり此朝用水桶の水氷りたり蒸気車の代ハ登降にて六円宿賃ハ四円半の高直なれ共客の有ハ纔百日前後なれハ無法の直段とも云へれまし夫より「フランコニア」と云ふ所に廻りたるに或山の頂に老人の顔と云ふ岩あり其形ち鬚の生たる人の顔に寸分違ハし如何にも奇妙なる岩なり返響(エコー)湖と名付る湖あり大筒を打ては四方の

山彦に響き十五度程返響し喇叭を吹ハ六度程響返るなり又「フルム」と云ふ所にハ花崗岩の盈を布たる如きもの凡十間余も引続き其を伝て遶る一線の流水あり其水源の方に往て見るに兩岸の石壁削るか如く其上一ツの大石が狭まり今にも落んかと思はれる計なり其下に二枚板の細道を付見物人の便に供ふ彼石の下を通る節ハ諸人思ハし早足に成なり其辺の景色総て画家詩家の魂を奪ふも計りなり旅籠屋も数ある中に六七百人を宿すもの二軒あり七月七日より九月十四日迄前便申上たる所に避暑し帰り途「ウキネペリーケー」と云ふ湖水を渡り当府に着したり彼湖水ハ避暑所より七八里にて島嶼の数三百六十五丁度一年の日数程あると云ふ日本の松島の風あり爰にて小舟を雇ひ島々を漕廻りたり西洋の舟ハ兩櫓にて漕事なるか覺の通り私ハ一返も舟を漕たる事なけれ共試しの為メ乗出したれハ始の程ハ舟の行事画にかいた稲妻の如く決して真直に進まざりしか後にハ大分上手に成たりし彼地滞留中南部君兄弟か遊に來れり南部君等の避暑所ハ右湖水の彼岸(ナカ)にて私共とハ只水を隔たる計なりし当府ハ残暑未タ除かし殊の外に暑し来三日よりハ矢張り元の学校に時々出掛る積なり其外或法律学者に就自分の好きな課を猶深く学ぶ心組なり土魯戦争の原由ハ次便に譲りたし藤田君江の返事も次に廻す御祖母様にハ悔みを申上る其他皆様にハ宜敷言伝を願ふ田舎より帰たれハ皆々私ハ大想丈夫そうに見得ると云ふから安心なさるへし

御尊父様

武夫拜

(長閑注記)

「十一月廿日達し日数六十七日」